性犯罪に時効はない！――「紛争下の性暴力根絶のための国際デー」報告

梶村道子（ベルリン・女の会）

ベルリンの街角に「平和の像」が建ってまもなく3年。日本政府は依然としてミッテ区の懐柔を諦めないようですが、区長は昨年秋、さらに2年の設置を認める発言をしました。

6月19日、その「平和の像」の前で集会が開かれました。テーマは「性犯罪に時効はない！」。ミッテ区の区議たちと像の設置者のコリア協議会の間で、「紛争下の性暴力根絶のための国際デー」にキャンペーンをやろうとの話が持ち上がり、コリア協議会とベルリン・女の会が準備しました。区からの参加は、区議のベラ・モルゲンシュテルンさん（社会民主党）、イングリット・ベルターマンさん（左派党）、ルーシー・シュレーダーさん（緑の党）、女性評議会のケァスティン・ドゥロビックさん。議会で像の継続設置を推し進めてきた区議たちも、このような公開の場でのスピーチは初めてです。

ルーシーさんは日常の性暴力根絶キャンペーンに像の存在は重要だと話し、イングリットさんは、戦時にもっとも被害を被るのは、武器として利用される女性や子ども、そして老人と弱者だと、反戦を呼びかけます。ベラさんは、ドイツの市民が「ノー」と言ったとき社会が変わった、一人一人が性暴力に「ノー」と言い、社会を変えていこうと語りました。

続いて5つの紛争地域出身の女性グループから報告がありましたが、とりわけ、現在進行形の紛争地からのものは、その惨状を伝える厳しいものでした。

「ティグレ・ユニティ」のブレン・デスタさんは、エチオピアのティグレ自治州出身です。ティグレには2020年秋、エチオピア政府軍と隣国のエリトリア軍が侵攻。ティグレ人民解放戦線との2年に及ぶ戦闘で、多数の死者と難民を出しました。「性暴力が戦争手段にされ、ティグレの女性と少女の多くが身体的、精神的被害を受けた」とブレンさん。国際社会の仲裁で2022年に和平協定が結ばれましたが、「市民は、いまこの瞬間もアムハラ義勇軍の残忍な民族虐殺キャンペーンに怯え、何百万人もが意図的に飢餓状態に追いやられている」といいます。

その隣国のスーダンで、今年の4月に政府軍と義勇軍の間で起こった激しい戦闘と破壊はいまも続きます。スーダンの女性団体「ダルスーダン」のサーラさんは、190万人もが難民となり、都市のライフラインは破壊され、女性と子どもへの性暴力の報告が毎日届く、と語ります。しかし病院は機能停止し、「襲われた女性たちを庇護し、身体と精神の傷を治療する場がない」と。アフリカ諸国の中では比較的安定していたスーダンは、これまで周囲の紛争地域から多くの難民を受け入れてきました。サーラさんは、「30年も前にレイプ・虐待され、ダルフールや南スーダンから逃げてきた女性たちが、ふたたび難民にされている」と指摘し、「ティグレから来たばかりの人たちも」と付け加えました。

「私たちはスーダンから来たから、戦時にどんな暴力が女性に振るわれるかを、権力者がサバイバーへの正義を拒否し、不正義を認めることさえ拒むことを、知っている。だから「慰安婦」に正義を求める闘いは、私たちの闘いだ」と語るサーラさん。

ティグレのブレンさんは、EU、とりわけフェミニズム外交を標榜するドイツが、紛争の終結を急ぐあまり、戦争犯罪と人道に対する犯罪に沈黙するのは受け入れ難いと訴え、正義の実現と責任者の追求抜きの平和と和解はありえないと、武力紛争下の女性と子どもへの性暴力の防止を保証する外交・安全保障政策を緊急に実現するよう、ドイツ政府に求めました。

こうした紛争とその被害は、報道はされても、ウクライナ戦争の陰に隠れて注目されません。日々故国から届く報告に苛立ち、悲しみ、憤るティグレやスーダンの女性たちは、このように声をあげられる場があることが嬉しいと言います。区議たちが市民とともに耳を傾ける場であれば、なおさらです。「ヤジディ教徒女性評議会」のヌジアンさんやアフガニスタンの「ファルコンダ女性協会」のサハール・モハマディさん、あるいはフィリピンの「ガブリエラ」のカティ・アボンさんにしても、それは同様です。

サンフランシスコの「社会正義のための教育基金」のソーン・スンさんは、「日本軍性奴隷制のサバイバーや沈黙を強いられた性暴力被害者の声が教えてくれるのは、ほかの被害者を支援し彼女たちのために尽力するのは、私たち全員の責任だということだ」と言います。「平和の像」がそのための場を提供していることを実感した1日でした。（写真はいずれも筆者提供）